

ADVANレーシングタイヤインフォメーション

2007年 SUPERGTシリーズ第5戦

2007.7.29

SUGO GT 300km RACE



全9戦で争われるSUPERGTシリーズは、今回が5戦目とあって、ちょうど折り返し地点に達することとなった。夏の山場となることが大いに予想されるレースの舞台、スポーツランドSUGOはアップダウンの激しいテクニカルコースで、コース幅は決して広くない。それゆえ、一触即発のバトルが繰り返られることが多い。

前回、セパンサーキットで行われたシリーズ第4戦では、WOODONE ADVAN Clarion Zが初優勝。ADVANレーシングとしても、05年の開幕戦でECLIPSE ADVAN SUPRAで飾られて以来、2年3か月ぶりの勝利の美酒は格別な味だった。灼熱の国、マレーシアでのレースはただでさえ過酷であるにもかかわらず、直前になって路面改修が行われたことでコンディションが一変。特に摩耗に関しては極めて厳しくなっていた。このような状況下で、他社ユーザーの多くが、2ピットを強いられる中、ADVANレーシングタイヤが1ピットでも安定してタイムを刻み続けられたことが、何より最大の勝因。また、もう一台のADVANレーシングタイヤユーザーのECLIPSE ADVAN SC430も5位入賞を果たしている。

前回の結果をふまえ、今回使用されるのはセパンで用いられたタイヤの正常進化版といえる。特にECLIPSE ADVAN SC430には、リヤに新構造が前回より取り入れられたのに続き、フロントにも新構造が採用された。この新たな組み合わせに関しては、7月17～18日に富士スピードウェイで行われたテストにおいて確認済で、

ドライバーからも高評価が得られている。まだウエイトハンディを背負っていないこともあり、今回は「狙い」に来るレースとなるのは間違いない。一方、WOODONE ADVAN Clarion Zは前回の優勝で50kgのウエイトを積んだこともあり、厳しいレースとなりそうだが、この状況でどれだけ上位につけられるかで、後半戦の戦い方も変わってくるだろう。

GT300クラスでは、EBBRO 350Rが前回のレースで2位入賞。一時トップも走り、初めて表彰台に上がることとなった。一方、エンドレスアドバン洗剤革命Zも6位につけて、結果的にウエイトも下ろすことができ、再び勝負圏に返り咲くことに。また、前回11位に甘んじたものの、プライベートKENZOアセット・紫電もほぼ同じウエイトとなったことから、こちらもまた今回のレースを勝負の機会とするのは間違いない。

レースウィークに持ち込まれるGT500クラス用のドライタイヤはSC430、Zとともに構造1種類、コンパウンドが2種類。路面温度が35℃以下ならミディアムソフトが推奨となり、それ以上ならミディアムとなるが、レインタイヤも構造1種類、コンパウンド2種類。GT300クラスのドライタイヤは構造1種類、コンパウンド2種類。なお、1コーナーをパッシングポイントとするためには、さかのぼってストレート、最終コーナーの通過速度を高める必要があるため、セッティングは特に最終コーナーを重視して進められよう。今回は合計で約1700本のADVANレーシングタイヤが用意される。



2007年 SUPERGTシリーズ第5戦用ADVANTイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (MS, M)	2種類 (MS, M)
	サイズ	330/710R18, 330/710R17	250/650R18, 280/680R18, 280/710R18
ウエット用レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (MS, M)	2種類 (MS, S)
	サイズ	330/710R18	250/650R18, 280/680R18, 280/710R18

ADVANドライバーズトピックス ロータスカップ・ジャパン

新感覚のワンメイクレース
ミッドシップスポーツで颯爽と走ろう!



ADVANがオフィシャルタイヤとなっているレースはいくつも存在しますが、その中で最も新しいのがロータスカップ・ジャパン。今年からスタートを切った、ロータス・エリーゼSを用いるワンメイクレースです。カップカーにはあらかじめレース専用パーツが装着されているため、すぐにレースに出場でき、しかもナンバーがついているので自走してサーキットに足を運ぶことも可能。専用パーツといっても6点式のロールケージの他は、ダンパーやスプリング、ブレーキパッドなど、いずれもボルトオンで装着できるもので、乗り心地を損なわないよう配慮されているのも特徴です。

このレースの指定タイヤは、ロータス・エリーゼSに標準装着されている、ADVAN Neova AD07LTS (F:175/55R16 R:225/45R17)。ドライ、ウェットいずれのコンディションでも1スペックで対応できるよう配慮されているだけでなく、マシンのパフォーマンスに対し、抜群のマッチングを見せるのが、採用された一番の理由です。なお、セットアップが許されるのは、そのタイヤの空気圧とダンパーの減衰力調整のみ。エンジン、ミッション、ECU (コンピュータ) は封印されるので、イコールコンディションが保たれて、ドライバーは純粋に腕の差で勝負することが可能となっています。

このロータスカップ・ジャパンに、ADVANは赤黒のオリジナルカラーリングを施した25号車を走らせ、毎回ゲストドライバーを起用。第1戦には漫画家の池沢早人師選手が、そして第2戦には田中哲也選手

が出場することに。マシンやレースの印象を田中選手に聞いてみました。

「エンジンは決してパワフルではないのですが、クルマが軽く、しかも後輪駆動なのでバランスにすぐれ、走っていてすごく楽しかった。装着されているADVAN Neova AD07LTSも、グリップレベルがクルマのパフォーマンスにピッタリでしたね。エントラントの中には、アドバイスを求めてきたり、挑戦状を叩きつけてきた方もいて(笑)、皆さんやる気に満ちていたのは好印象でした。これからも楽しく、気持ち良くレースしていただきたいですね!」

国内A級ライセンス保持者が対象のため、国際ライセンスを持つ田中選手は賞典外参加となり、後方グリッドからのスタートとなりましたが、それでも目の覚めるような追い上げを見せてくれました。なお、今年は全4戦でのシリーズ開催が予定され、残るレースは筑波サーキット(10月7日)とツインリンクもてぎ(12月2日)にて行われます。これからもロータスカップ・ジャパンと、ADVANの送り込むゲストドライバーにご注目ください!



田中 哲也 たなか てつや

©GTA

1965年・京都府出身。1988年にFJ1600でレースデビュー。その後順調なステップアップを果たし、フォーミュラ・ニッポンや全日本GT選手権といったトップカテゴリーで活躍。また、レース車両や自動車用品の開発ドライバーとしても優れた才能を発揮する。2007年はSUPER GTではGT300クラスの「EBBRO 350R」、スーパー耐久でもST-1クラスの「CAR-CHANNEL アドバン Z33」と、ともにADVAN装着車で戦っている。

GT300ルーキーにインタビュー



©GTA

さかくち りょうへい

1975年2月6日生まれ、大阪府出身。カートレースからキャリアを重ね、96年にはF4でチャンピオンを獲得し、その翌年にはF3にも参戦する。その後、スーパー耐久やシビックインターカップなどツーリングカーレースに出場。また、99年からは韓国のレースにも出場し、99年にはKMRC F-1800のチャンピオンを獲得した。鈴鹿RSクラスのレコードホルダーでもあり、ADVANタイヤの使い手としても知られる。



阪口良平 / TEAM UEMATSU

注目のルーキーを紹介するこのコーナーで、今回ピックアップしたのはTEAM UEMATSUからエントリーの阪口良平選手。近年はスーパー耐久シリーズなど、ツーリングカーレースでの活躍が目立っていますが、カート、フォーミュラ出身で、どんなクルマでも乗りこなすユーティリティドライバーとしても知られ、今年ついにスーパーGTに念願のフル参戦を果たすことになりました。

——ルーキーといっても、今年の開幕戦が実は初レースではなくて.....

阪口 「はい、昨年の鈴鹿1000kmが最初のレースです。その時はボルシェをドライブさせてもらいました」

——その時の走りが評価されて、今年のフル参戦につながった?

阪口 「そういうことなんですけど、その時、一緒に走ったヴィーマックの印象がすごく、乗るんだったら、これしかないと思って、話を持っていったんです。そしたら、思いが通じて乗ることになって。不思議なもので願って、思ったらかなうもんなんだなあ、と。過去にもそんなことがあったんですよ」

——例えば、他には?

阪口 「去年の1000kmもそうでしたし、韓国のGTレースでも。それまではプライベートチームから出ていたんですけど、ヒュンダイのワークスカーに乗りたいたってたら、夢がかないましたからね。でも、そういうのって協力してくれる、まわりの人たちのおかげであって、偶然じゃないんですけど」

——いや、それは必然なんですよ(笑)。ところで、第4戦は欠場しましたが、第3戦では7位に。かなり手応えもつかみつつあるのでは?

阪口 「そうですね。もともとフォーミュラ出身なので、ヴィーマックに違和感はないですし、クルマもメンテナンスしてくれるテラモト・テクニカル・オフィスも含め、パッケージとしては最高だと思うんで。ただ、思ったより攻めたら攻めた分だけフロントが反応しないんで、そのあたりと戦っている最中です。これさえ改善できれば、後半戦期待できるんじゃないでしょうか。あとちょっとという感じなので、しっかり煮詰まった時には、もっと注目してもらいたいですね!」